

## 茶臼山植物雑記

廣江 伸作\*

平成 23 年 5 月より約 6 ヶ月間、南信州茶臼山高原両生類研究所 (通称カエル館) に所属しながら、茶臼山 (1415m) の植物調査をしてきたので、「茶臼山の植生概況」と「特別な思い出がある植物」について報告したい。

### 1. 茶臼山の植物概況

茶臼山は、山頂と山頂に連なる稜線が長野県と愛知県との県境になっている山である。特に、愛知県にはこれより高い山はなく、山頂より南側を見下ろすと愛知県の南三河地方一帯が展望できる。

太平洋に面している愛知県側からは、南からの暖かくて湿った空気が吹き寄せてきて、この山に突き当たって降雨となり、年間降水量が 3000 ミリを越すほど、多量の雨を降らせている。また、冬季は大陸からの季節風の影響を受け、スキーができるほどの積雪をもたらしている。

植生状況として、長野県側は、冷涼な気候 (年間平均気温約 9 度) を反映して、二次林としての性格をもつものの、ブナをはじめ、日本の多くのブナ林で見られる植物がたくさん見られることから、ブナ林 (茶臼山の植生 1972 羽田健三他) に結びつく植生となっている。特に、長野県売木村のアテビの森は、ネズコ、サワラなどの針葉樹の自然林が一部残っている貴重なところとなっている。しかし、愛知県側は代償植生が目立ち、広く牧場として利用されているところもあるなど開発の影響を強く受けているのは否めない。

植物相の特徴的なところとして、年間降水量の多さを反映して、フジシダやシラネウラボシなどのシダ植物が岩の上に繁茂しているのが見られる他、登山道や溪流沿いではユリワサビ (写真 1)、コガネネコノメソウ (写真 2) などの湿地性植物が多く見られる点をまずあげることができる。

さらに、愛知県との県境に位置している関係上、エンシュウツリフネソウ (写真 3)、シコクスミレ (写真 4)、ヒメミヤマスミレ (写真 5)、ヒメカンアオイ (写真 6)、ミヤマナミキ (写真 7)、アオホオズ

キ (写真 8)、テバコモミジガサ (写真 9)、ダントタムラソウ (写真 10)、イヌヤマハッカ (写真 11) など、東海地方に分布している植物をたくさん見ることができるところともなっている。

### 2. 特別な思い出がある植物

茶臼山での植物調査は、全くはじめての土地柄であったため、当初から全く手さぐり状態の連続で



写真 1 ユリワサビ



写真 2 コガネネコノメソウ



写真 3 エンシュウツリフネソウ

\* 茶臼山高原両生類研究所



写真4 シコクスミレ



写真5 ヒメミヤマスミレ



写真6 ヒメカンアオイ



写真7 ミヤマナミキ



写真8 アオホオズキ



写真9 テバコモミジガサ



写真10 ダンドタムラソウ



写真11 イヌヤマハッカ

あった。そんな中、貴重な植物との出会いの過程について、「特別に思い出のある植物」として取り上げてみたい。

#### マルバタチツボスミレ(スミレ科)

*Viola × obtusogrypoceras*

はじめてこのスミレに出会ったとき、ニオイタチツボスミレのように小さく、花弁内部の白色部の区別が明らかであったので、ニオイタチツボスミレではないかと思った。しかし、花や葉は少し大きく、花の色がやや淡いため花弁内部の白さもニオイタチツボスミレほど強いコントラストを感じないでいた。そのため、ニオイタチツボスミレそのものとは多少距離があると感じていた。

そんな迷いの中、「信州のスミレ」(ほおずき書籍)にタチツボスミレとニオイタチツボスミレの雑種としてマルバタチツボスミレが紹介してあった。それによると、「全体や各部分は親種の中間的形態である。花は中形のやや濃い紫紅色で、ニオイタチツボスミレのように花芯部が白色で芳香がある。茎には短い毛があるが葉にはほとんどない。」などとあり、マルバタチツボスミレと判断するに至ったものである。長野県版レッドリストでは貴重雑種にあげられている。

なお、長野県植物誌では、学名は同じだが、和名の方はマルバタチツボとして掲載されていることを追記しておきたい。

#### ヒメミヤマスミレ(スミレ科) (写真5)

*Viola boissieuana*

花の色は、淡い紅紫色、大きさ約1センチの小さな花を咲かせる。大変小型で地味だが、長野県版レッドリストでは「絶滅危惧ⅠB類」に属しているものである。

当初、植物名として、なかなか思い当たるものがなく、暗中模索であったが、やはり「信州のスミレ」(ほおずき書籍)でヒメミヤマスミレとわかったものである。それによると、「本県のもは“東海型ヒメミヤマスミレ”と呼ばれ、新種とする説もある。」ともあった。

その点、「スミレハンドブック」(文一総合出版)の方では、トウカイスミレとして紹介されており、「ヒメミヤマスミレと混同されていたが、杉本順一氏により別種とされた。まだ正式な記載はない。」と書いてある。

分布は、四国・紀伊半島・関東・東海地方で、い

わゆる太平洋側の植物のため長野県では貴重な植物となっている。

#### ミヤマナミキ(シソ科) (写真7)

*Scutellaria shikokiana*

最初、この植物に出会ったのは、茶白山の愛知県側であった。まず花が唇形であったことからシソ科の植物と目的を絞ることができた。標本を採取して、さっそく「日本の野生植物 Ⅲ」(平凡社)で検索してみると、葉や花の形態的特徴からミヤマナミキと検討をつけることができた。

それから、二か月くらいして、今度は矢作川の源流部でまた、ミヤマナミキを見つけることができた。今度は、茶白山の長野県側なので長野県植物誌でも確認してみようと思い調べてみると、未確認種となっていて驚いた。これはもしかすると大変なことになるかもしれないと思い、すぐに長野県環境保全研究所に標本を送付したところやはり間違いのないという返事であった。

このことはカエル館にとって大変な吉報となり、信濃毎日新聞に取材依頼をしたところ、翌朝の記事としてさっそく取り上げてもらうことになった。新聞で、「県内では1973(昭和48)年に南佐久郡で採取された標本の記録が県植物誌資料集CD版に収録されている程度。専門家により現地で自生が確認されれば約40年ぶり。」と長野県環境保全研究所の大塚孝一郎長の談話を掲載してもらうことにより、新発見の意義を詳しく紹介してもらうことができた。

ミヤマナミキは太平洋側の植物で、長野県では最南端の茶白山で見られる貴重な植物となった。源流部には少しだけしか生育していないので、開発などによって絶滅することがないように願っているところである。

#### アオホオズキ(ナス科) (写真8)

*Physalisstrum japonicum*

この植物との出会いは9月初めのことで、茶白山ではいつもよく調査のための散策をしているコースであったが、ずっと見過ごしてきたものだった。イガホオズキに似た液果を見たときには新しい植物との出会いに驚いてしまった。後で撮影した写真分析をしてみて、液果の刺状突起がごく短く、ナス科のアオホオズキと判断できた。後日、他にもないかと周りを探したが、残念ながら他には見つかっていない。

長野県植物誌では、分布は本州・四国で、県内では南部で稀と紹介されている。貴重種なので、長野県環境保全研究所に報告をしたところ、やはりアオホオズキで、長野県植物誌では、産地の記載はないが、標本記録としては、飯島町、阿智村、豊丘村、天龍村、南信濃村、王滝村、南木曾町などがある、とコメントをいただいた。この植物も長野県版レッドリストで「絶滅危惧ⅠA類」に属している。

#### トヨボタニソバ(タデ科)

##### *Persicaria geocarpica*

9月中旬、茶臼山湖畔で、タデ科のヤノネグサに似ているが、茎の先に花を一つか二つしかつけない見慣れない植物を見つけた。写真撮影と標本採取を行い、長野県植物誌をはじめ、「日本の野生植物」(平凡社)などで検索するが、なかなか一致する植物を見つけ出すことができなかった。

そこで、アオホオズキと同様に、長野県環境保全研究所に、この植物の特徴を簡条書きしたものを添えて、標本の同定依頼をすることにした。

その内容は、「1、茎には下向きの刺があり、赤紫色をしている。2、葉は小型で、長さ1.8cm、幅2cm、矛形、中央裂片の基部は狭まることはない。3、花は花柄の先に普通一つ、たまに二つつけている。(ここの花のつき方が極端に少ないのが最大の特徴になっていると思う。)」であった。

まもなく、同研究所の大塚孝一郎長より、植物は、トヨボタニソバと思われること、愛知、岐阜、長野3県の県境付近に知られていること、そして、日本植物学会で発表されているが、まだ正式に記載されていないため学名は裸名で、図鑑等には載っていないこと、そして、今のところ、長野県では、平谷村、根羽村、天龍村から見つかった、とコメントをいただいた。

もしかすると新種の可能性もあると内心期待はしていたが、やはりハードルは高かった。それでも地域限定型の貴重種が茶臼山でも見つかり、意義深いものを感じとることができた。

なお、インターネットでトヨボタニソバを検索してみると、金沢大学で研究されていることがわかったので、同大学の植田邦彦先生にも、茶臼山でも見つかったことを一応連絡しておいたところ、まもなく、植田先生より、茶臼山はおおよそ分布の真ん中にあたること、まだまだ情報不足であるのでまた是非知らせてほしいこと、そして、トヨボタニソバの

論文をちょうど投稿したところであるので、それほど遠くない時期に正式に新種記載される見通しである、との返信をいただいている。

今後の研究成果が待たれるところである。

以上、平成23年度における調査活動を振り返って、「茶臼山植物雑記」としてまとめてみたものであるが、これから2年後、一応の「茶臼山植物のリスト」を作成してみたいと考えている。今回の発表を機会に会員の方々より茶臼山に関する情報をいただけたらと願っている。

なお、ここに紹介した全ての植物標本は長野県環境保全研究所の方に送付済みであるし、「特別な思い出がある植物」で取り上げた植物については画像についても送信している。

#### 追記1. 標本の採集地

長野県下伊那郡売木村

ネズコ、サワラ、シコクスミレ、ヒメカンアオイ

長野県下伊那郡根羽村

フジシダ、シラネウラボ、ユリワサビ、コガネキノメソウ、エンシュウツリフネソウ、ヒメミヤマスマミレ、ミヤマナミキ、アオホオズキ、テバコモミジガサ、ダンドタムラソウ、イヌヤマハッカ、マルバタチツボスマミレ

#### 追記2. 参考文献

根羽村誌編集委員会(1993) 根羽村誌上巻(自然編. 歴史編)

清水建美(1997) 長野県植物誌 信濃毎日新聞社

山田隆彦(2010) スミレハンドブック 文一総合出版

今井建樹他(2004) 信州のスミレ ほおずき書籍

羽田健三他(1972) 茶臼山の植生(植物社会学的研究)

北村四郎他(1971) 原色日本植物図鑑 木本編(Ⅰ)~(Ⅱ) 保育社

佐竹義輔他(1981) 日本の野生植物(Ⅰ)~(Ⅲ) 平凡社

岩槻邦男(1992) 日本の野生植物 シダ 平凡社

大塚孝一(2004) 信州のシダ ほおずき書籍